様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２８０６
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１４１３５

研究課題名（和文）中国系ニューカマー青年の進路意識に関する研究―地域移動と国家間移動の関連から―

研究課題名（英文）A Study on the Life Path of Young Chinese Newcomers to Japan: Focusing on Regional Migration and Transnational Migration

研究代表者
劉　昊（LIU, HAO）

ＬＥＣ東京リーガルマインド大学院大学・高度専門職研究科・准教授

研究者番号：８０８０８２２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、中国系を事例に、ニューカマー青年の進路意識を日本国内における地域移動と日中間の国家間移動に着目して考察することであった。本研究では、中国系ニューカマー第2世代20名に対してライフストーリーの聞き取り調査を行った。
その結果、親の伝統的規範意識によって、家から「脱出」するように地域移動を伴う進路選択をした対象者の姿が明らかになった。また、日本国内における地域移動を伴う大学進学をした者の大学での学びを考察した結果、進学先におけるルーツ観光や留学などの経験が、将来展望に対する対象者の語り直しを可能にしていた点が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究最大の成果は、従来論じられなかった地域移動に対する当事者の意味づけ明らかにしている点である。先行研究では、国家間移動をともなうトランスナショナルな進路形成の多様性が論じられてきた。しかし、全ての者がそうした進路を形成しない/できない点を考えると、日本国内での移動にも目を向ける必要がある。新型コロナウィルスの流行により、想定していた調査を十分行うことができなかったものの、国家間移動だけでもなく、また地域移動だけでもない、より複合的なニューカマーの進路意識を検討したことよって、先行研究の空白を一定程度埋めることができたと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the career path consciousness of newcomer youth with a case study of Chinese descent, focusing on regional migration within Japan and transnational migration between Japan and China. In this study, life story interviews were conducted with 20 second-generation Chinese Newcomers. The results revealed that the subjects made career choices that involved regional mobility to "escape" from home due to their parents' traditional normative attitudes. Furthermore, the results of the study of the university studies of those who entered universities in Japan with regional mobility revealed that experiences such as " roots tourism" and studying abroad at university enabled the subjects to reconsider their future prospects.

研究分野：異文化間教育学、教育社会学、移民研究

キーワード：ニューカマー　在日中国人　進路選択　国家間移動　地域移動

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

これまで、ニューカマー第 2 世代の進路に関する研究は、高校進学や大学進学が中心的な論点となって展開してきた（例えば、山崎 2005; 広崎 2007; 鍛治 2007）。一方、近年では進路選択に伴う「移動の実践」や「移動の物語」など、当事者自身の「移動の論理」が注目されるようになった。なかでも、ニューカマーの子どもたちの将来が日本のみならず、国境を越えた場所にも存在するという、トランスナショナルな進路形成が大きな関心を寄せられている（徳永 2008; 児島 2010; 山本 2014; 山ノ内 2016 など）。こうした研究は、ニューカマー第 2 世代の進路の多様性を明らかにした点で非常に意義がある。

一方、先行研究が見逃してきた点として、日本国内における地域移動に関する議論を指摘することができる。地域移動に関して、従来の研究では日系ブラジル人を事例に、頻繁な地域移動が子どもたちの学業を切断し、学校からの離脱や早期就労を促すという指摘がしばしばなされてきた（児島 2008; 2013）。しかし、こうした指摘はあくまでも子どもたちが親に伴われる存在としての姿が明らかにされているにとどまっている。つまり、移動に伴う子どもたち自身の論理が不問とされてきたといえる。

確かに進路研究が始まった当初は子どもたちの年齢がまだ低く、親に伴われて移動するしかない存在として認識されるのは必然だったかもしれないが、ニューカマーの増加から 30 年近く経過し、第 2 世代も結婚し子を授かる時期になっている。こうした状況をふまえ、今一度ニューカマーの子どもたちの進路と日本国内における地域移動の関係に着目することも重要だと考えたのが本研究の背景である。

<引用文献>

鍛治致（2007）「中国出身生徒の進路規定要因―大阪の中国帰国生徒を中心に―」『教育社会学研究』80, pp.331-349.

児島明（2008）「在日ブラジル人の若者の進路選択過程―学校からの離脱/就労への水路づけ―」『和光大学現代人間学部紀要』1, pp.55-72.

児島明（2010）「国境を越える移動と進路形成―滞日経験をもつブラジル人青年の生活史分析から―」『地域学論集』 7 (2), pp.253-283.

児島明（2013）「ニューカマー青年の視点に立った移行支援の可能性―日系ブラジル人青年の『自立』への模索を手がかりに―」『異文化間教育』37, pp.32-46.

徳永智子（2008）「『フィリピン系ニューカマー』生徒の進路意識と将来展望―『重要な他者』と『来日経緯』に着目して―」『異文化間教育』28, pp.87-99.

広崎純子（2007）「進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択―支援活動の取り組みを通じての変容過程―」『教育社会学研究』80, pp.227-245.

山﨑香織.2005.「新来外国人生徒と進路指導―『加熱』と『冷却』の機能に注目して―」『異文化間教育』1, pp.5-18.

山本晃輔（2014）「帰国した日系ブラジル人の子どもたちの進路選択―移動の物語に注目して―」『教育社会学研究』94, pp.281-301.

山ノ内裕子（2016）「ブラジルへ帰国した日系人の若者たちの進路とエスニック・アイデンティティ―トランスマイグラントとしての経験から―」『人権問題研究室紀要』72, pp.23-46.

２．研究の目的

①中国系ニューカマー青年たちの国家間移動を促す要因や地域移動を促す要因は何か。

②中国系ニューカマー青年たちは進路選択の際に、中国と日本の両国をどのように見つめながら国家間移動や地域移動を行うのか。

③進路選択の際に、親の教育戦略やコミュニティが国家間移動や地域移動にどのような影響を与えるのか。

３．研究の方法

2019 年度～2022 年度の研究期間において、在日中国系ニューカマー第 2 世代 20 名に対して半構造化インタビュー調査を行った。具体的には、「ライフストーリー」や「物語論」に注目して、調査対象者の進路がどのように選ばれたのか、そして将来展望が過去の経験とどのように結びつき修正されていくのかを検討した。なお、本研究では中国での調査も予定していたが、新型コロナウイルスの流行により、日本国内に限定して調査を行った。また、調査に関しては対面を中心としつつ希望により ZOOM などの SNS を用いた。

４．研究成果

研究期間内において、新型コロナウイルスの流行が発生したため、上記①～③の目的について、十分な調査や分析を行うことができなかったが、収集したインタビューデータをもとに下記の成果を挙げることができた。

(1)劉昊（2020）「中国系第 2 世代の将来展望―大学進学後の経験に着目して―」『国際教育』26 号, pp.1-17.

進路選択を考える際、大学進学は重要なポイントとなるが、大学進学に際しては国内外を問わず、移動を伴うことが多い。そこで、進学先、すなわち移動先がかれらにとってどのような「場所」として意味づけられているのかを、地域移動を経験した者を中心に検討した。

具体的な検討結果は以下のとおりである。まず、進学先における重要な経験として対象者たちが語ったのは、「留学経験によるルーツの肯定」「ルーツ観光による将来の方向づけ」「現実直視による将来展望の限定化」の 3 点である。そして、これらの語りから、次の 2 点を指摘した。

第 1 に、「大学の補完性」である。先行研究では、学校を補完する場所として、宗教施設や地域学習室など学校外の場所の重要性が指摘されてきた。一方で、そうした資源を獲得できない場合でも、大学における諸経験がルーツに対する自己肯定感を取り戻させたり、将来展望を多様なものにする可能性がある。第 2 に、物語の修正性を「大学ならではの学び」と関連させて理解することである。先行研究では、ニューカマー第 2 世代が育ちの過程で、将来展望や進路意識を「自分の物語」として語り直していく様子が描かれてきた。本稿の調査対象者たちも、大学ならではの経験を背景に将来展望を語り直していた。そのため、今後は大学だからこそ提供できる資源や大学だからこそ経験できる学びも考慮することが必要である。

(2) 劉昊(2021)「育ちの場としてのエスニック・ビジネス事業所―中華料理店を事例として―」『比較文化研究』144 号, pp.167-176.

本研究では、収集したインタビューデータ及び過去に収集したデータを用いて、当初とは異なる視点からも中国系第 2 世代の進路形成を検討した。

ニューカマーの教育をめぐる諸課題では、「言語」「適応」「学力」「進路」「不就学」「アイデンティティ」の 6 つを軸に研究が行われてきた（志水 2008）。他方、これらの課題を検討する際、ニューカマーの増加から 20 年以上経過した 2010 年代頃から「育ちの過程」（三浦 2015）が重要視されるようになった。育ちの過程とは、「ルーツ」のみならず、どのようにして「今ここ」にいるのかという「ルート」（渋谷 2013; 高橋 2013; 松尾 2013 など）を指す。育ちの過程への着目は、増加するニューカマー第 2 世代以降の「多様化する内実をつかみ取る」（三浦 2015, p.8）ことにつながる。

育ちの過程に関して、これまで注目されてきた重要な点の 1 つとしてニューカマー第 2 世代を取り巻く「育ちの場」（三浦 2015）が挙げられる。例えば、学校や職場、地域社会などの場と個の関係性に注目する重要性が指摘されている（加賀美他編 2016）。こうした背景を踏まえ、本研究では中国系第 2 世代と場の関係性に注目した。具体的には、両親が経営する中華料理店を手伝う中国系第 2 世代を対象に、エスニック・ビジネス事業所の「育ちの場」としての側面に注目して検討を行った。

その結果、調査対象者が親の事業を手伝う背景には、「孝文化」や「ジェンダー役割」といった中国の伝統的規範の影響があった点が明らかになった。そして、そうした規範による「束縛」に起因する親との関係性によって、対象者は店を消極的に意味づけるようになり、脱出を図るために地域移動を行った。しかし、その後再度店を手伝った際に経験した顧客や料理人との関わりによって、「中国人ネットワークへの参加」「中国に対する関心の獲得と学びの捉え直し」など、対象者にとって店が「中国との再接続の場」としての役割を果たしている点が明らかになった。

<引用文献>

加賀美常美代他編（2016）『文化接触における場としてのダイナミズム』明石書店.

渋谷真樹（2013）「ルーツからルートへ―ニューカマーの子どもたちの今―」『異文化間教育』37 号, pp.1-14.

志水宏吉（2008）「ニューカマーと日本の学校」志水宏吉編著『高校を生きるニューカマー―大阪府立高校にみる教育支援―』明石書店, pp.12-28.

高橋朋子（2013）「中国帰国児童の主体的な関係性の構築を目指して」『異文化間教育』37 号, pp.15-31.

松尾知明（2013）「ニューカマーの子どもたちの今を考える－日本人性の視点から－」『異文化間教育』37 号, pp.63-77.

三浦綾希子（2015）『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ－第二世代のエスニックアイデンティティ－』勁草書房.

(3) Hao, Liu. (2022). Growing Up Chinese in Japan: An Autoethnography. SOCIAL THEORY and DYNAMICS, 3, 142-157.

ニューカマーの教育研究では研究者が調査対象者を「調査する」という立場のもとで進められてきた。一方で、当事者としてのニューカマーが自身をどうのように語り分析するのかに目を向

けられることはほとんどなかった。そこで、本研究では当事者の経験や感情を重視するオートエスノグラフィーの手法を用いて、「私」の成長物語を描き出した。

具体的には、「私」の人生を、①来日直後から小学校卒業まで、②中学校入学から高校卒業まで、③大学入学から現在までの 3 つの時期に分けて。描いた。物語からは、「弱者」とみなされがちである外国人の姿だけでなく、さまざまな困難を乗り越えて主体的に自己実現を選びとる「私」の姿が浮かび上がった。そして、その背景には恩師をはじめとする「重要な他者」や、そうした重要な他者との関係性のなかで築かれた学校内外の「居場所」があった。また、「私」が「当事者になっていく」過程で、大学時代での経験にもとづく自分自身との対話が大きな役割を果たしたことも明らかになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 劉昊	４．巻 未定
２．論文標題 「移民創造的場所」的小叙事 ー以自我民族志的論述方法ー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 国際社会科学雑誌	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hao, Liu	４．巻 3
２．論文標題 Growing Up Chinese in Japan: An Autoethnography	５．発行年 2022年
３．雑誌名 SOCIAL THEORY and DYNAMICS	６．最初と最後の頁 142-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 劉昊	４．巻 144
２．論文標題 育ちの場としてのエスニック・ビジネス事業所ー中華料理店を事例としてー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 比較文化研究	６．最初と最後の頁 167-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 劉昊	４．巻 第26号
２．論文標題 中国系第2世代の将来展望ー大学進学後の経験に着目してー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国際教育	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 劉昊
2．発表標題 私にとっての特別な場所 ―「店」と私の小さな物語 ―
3．学会等名 早稲田大学人間科学学術院共催 シンポジウム「オートエスノグラフィーから見る移民の物語：日本を生きる10人の語り」
4．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関